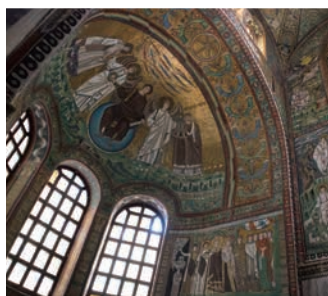




ヨーロッパ特集 2023





ひとつの「ヨーロッパ」を訴求 「多様性」「好奇心」「サステナビリティ」をキーワードに



エドゥアルド・サンタンダー

ヨーロッパ観光委員会 (ETC) エグゼクティブディレクター

新型コロナウイルスによる影響から脱しつつある海外旅行需要。そのなかで、日本マーケットへの期待は高まっている。ヨーロッパ各国の観光局で構成するヨーロッパ観光委員会 (ETC) は、2021年に日本支部の活動を再開。ひとつの「ヨーロッパ」として、日本マーケットへの訴求を図っている。昨年は「ツーリズムEXPOジャパン」に「ヨーロッパパビリオン」を出展、ミッションも派遣し、ETC幹部が来日した。今年も同イベントに出展、ミッションも予定する。日本マーケットへの期待や今後の展開など、ETCエグゼクティブディレクターとして初来日するエドゥアルド・サンタンダー氏に話を伺った。

市場回復へ向け日本市場に投資 今年も「ツーリズムEXPO」に出展 日本マーケットへの期待

歴史的に、日本市場はヨーロッパ諸国にとって、重要なインバウンド市場のひとつとしての役割を果たしてきた。これは、20世紀後半における日本の経済成長と繁栄のおかげである。

最近に目を転じると、日本はコロナ以前、渡航者数でEU圏外旅行市場の中で第5位を占めていた。2019年には、日本から欧州への旅行者はほぼ500万人に達し、日本の全出国者の19.2%という注目すべき市場シェアを構成した。しかし、新型コロナウイルスとウクライナ紛争により、日本の消費者は海外旅行の再開に一定の消極的な姿勢を示している。

とはいえ、ヨーロッパの各観光局は、市場回復を早めるために投資を続けており、日本人旅行者の再訪を切望している。10月に予定している欧州旅行委員会 (ETC) の訪日ミッションに参加できることを特に喜ばしく思うのはこのためだ。

私たちはすでに昨年、「ツーリズムEXPOジャパン」に参加、「ヨーロッパパビリオン」を



2021年のツーリズムEXPOジャパンに出展したヨーロッパパビリオン

出展したが、今年再び同イベントに出展し、日本の旅行業界の皆様と再会し、日本の旅行者を安心させることができることを大変うれしく思っている。

2021年より日本支部を再開 日本市場での活動は50年近くに

これまでの日本市場における
ETCの取組

ETCは50年近くにわたり、日本で存在感を示してきた。歴史的に重要な出来事をいくつか紹介したい。

ETCが日本市場に参入したのは、1974年に日本支部を設立してから。当初は、旅行会社や航空会社など、旅行業界との直接的な協力関係が中心だった。当時は「デスティネーション・ヨーロッパ」と題したマニュアルを発行し、日本全国の旅行業界関係者に配布した。

1976年、その活動は旅行業界にとどまらず、テレビやその他のメディアを通じたプロモーション活動を通じて消費者の関心を高めることに力を注いだ。もうひとつの重要な出来事は、1977年にETCが日本国内で初の会議を開催し、メディアと旅行会社向けの専用セッションを設けたことである。このイベントは大成功を収め、業界だけでなく日本の幅広い層の注目を集め、大きな反響を呼んだ。

約10年間の活動休止の期間を経て、2021年に日本支部を再開。この日本支部は、ETCの正会員であるヨーロッパ各国の観光局で構成されている。日本支部の主な役割は、旅行目的地としてのヨーロッパを宣伝しながら、マーケットリサーチやトレンド分析を活かし、旅行業界及び旅行者にヨーロッパの魅力を伝えることを目指している。

【表紙クレジット】(上から一段目左から) 提供:キプロス共和国観光担当省 (Deputy Ministry of Tourism, Republic of Cyprus)、©マルタ観光局、©Visit Finland、©Latvia Travel(上から二段目左から一番目と二番目) ©ATA Azores Tourism、©Pas Normal(上から二段目一番目) COPYRIGHT WBT-Anibal Trejo(上から三段目) ©スペイン政府観光局(上から四段目左から一番目と三番目) Credit: Renee Altrov、©DZT/Francesco Carovillano(上から五段目左から二〜四番目) ©Visit Iceland、©Sakralinė pirtis、©GNT0/Photo P Merakos



歴史や文化の多様性を訴求 パビリオンに8か国11団体参加

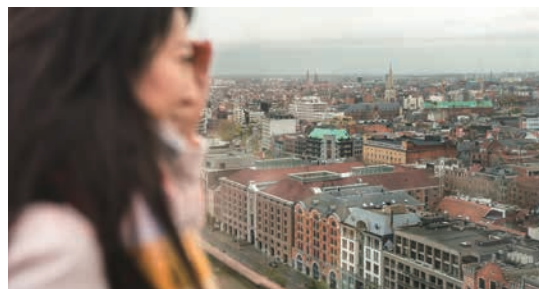
今後の日本市場における
ETCの展開について

ETCは、ヨーロッパ大陸でのテーマ別の体験に重点を置きながら、日本で人気の旅行先としてのヨーロッパを際立たせていく。ETCの焦点は、自然やアウトドア、歴史や伝統、文化や都市体験に興味を持つ自由な個人旅行者。私たちの目的は、一度の旅行で何か国も巡れるなど、ヨーロッパならではの魅力を紹介することだ。

例えば、日本人旅行者は異文化体験や史跡探訪に強い関心を持っている。ヨーロッパの豊かな歴史、建築、文化、食の多様性は、こうした体験を求める日本人旅行者の好奇心を掻き立てることができる。

既に述べたように、今年予定されている具体的な活動の中で、ヨーロッパパビリオンを通じてツーリズムEXPOジャパンに参加する。このパビリオンには、ベルギー、キプロス、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、ポルトガルから11のETC会員およびパートナーの代表が参加する（この他、バルト3国やイタリア、スペイン、ポーランド、マルタ、クロアチア、アイスランドなどがブース出展の予定）。

またミッションでは、日本旅行業協会（JATA）や旅行業界の主要なパートナーとも交流する予定。さらに、ツーリズムEXPOジャパンの閣僚懇談会にも参加する。これら会合は、ETCが日本の旅行業界と再びつながり、日本の旅行者を再び迎え入れるための欧州の心構えをアピールする絶好の場となると考えている。



コロナ前の水準にほぼ回復 費用増、持続可能な取組など課題に

ヨーロッパ観光市場の
現状と課題

最新のETC調査によると、2023年の欧州観光は好調な状態にある。インフレ、ウクライナ紛争、人員不足などの課題にも関わらず、2022年の国際観光客到着数は2019年の水準を18%下回るまでに回復した。2023年第2四半期は、コロナ以前の国際観光客到着数をわずか5%下回っただけだった。

当面の課題としては、インフレと旅行費用の増加が消費者の財布を圧迫していることが我々の調査で明らかになっている。この夏、多くの消費者がコスト面を考慮して旅行を決定した。しかし、消費者は旅行の価値を重要視しているため、このことが全体的な回復を妨げることはないだろう。

ヨーロッパ観光が再び最高水準に達しようとしている今、我々は旅行者の需要と回帰を効果的に管理する準備をしなければならない。

観光戦略は、過密状態に対処するデスティネーションを支援すると同時に、海外の旅行者が少ない地域にも観光の利益を広げるために、旅行の分散させる戦略が重要となる。ヨーロッパの観光地や観光産業は、観光で社会的、文化的、経済的に活性化できるよう、持続可能な観光への移行に取り組んでいる。

もちろん、これには気候変動の緩和とグリーン転換の緊急性も含まれる。ETCは、観光と気候変動との間の否定できない関係を十分に認識し、持続可能な観光を強く提唱している。

観光産業には、自然環境、野生生物、文化遺産など、旅行体験に命を吹き込む資源を保護する責任と機会がある。

この目的達成のため、私たちは今年、独自の気候行動計画を立ち上げた。この計画により、私たちはCO2排出量を削減し、加盟組織の気候変動対策を奨励することで、欧州の観光産業を牽引している。

統一メッセージで価値を強調 より強い存在感を示す

ETCとして活動し、ヨーロッパ全体を
プロモーションする意義

ETCは、ヨーロッパ各国の観光局を代表する統括組織。1948年に設立され、今年で75周年を迎える。ヨーロッパ全土から集まった35のメンバーが、ベストプラクティスの共有、マーケット情報の共有、プロモーションなどの協力を通じて、観光の価値を高めている。

ETCの活動の主な焦点は、海外市場におけるヨーロッパの観光地の共同プロモーションだ。加盟デスティネーションや観光業界との共同キャンペーンや、欧州連合（EU）からの資金援助を通じて、パートナーシップを築いている。

欧州全体をプロモーションすることで、欧州大陸の多様性、アクセスのしやすさ、共通の文化遺産を活用し、魅力的な旅行を提案している。個々の国が独自のアイデンティティとマーケティング努力を維持する一方で、欧州の共同プロモーションは、世界中の人々に対する欧州地域の全体的な魅力を高めることになる。ヨーロッパ全体として、まとまりのあるブランド・アイデンティティを構築することで、潜在的な旅行者に持続的な印象を与えることができる。統一されたメッセージは、文化の豊かさ、歴史的意義、多様な景観の探索のしやすさといった価値を強調する。

さらに、資源と専門知識を結集することで、欧州各国はより多くの旅行者にリーチし、世界の観光市場においてより強い存在感を示すことができる。

我々はまた、ヨーロッパが他の世界的な観光地との競争に直面していることも認識している。ヨーロッパをひとつの地域として宣伝することで、文化や歴史、自然や食など、多様な魅力ある競争力として打ち出すことができる。

日本人旅行者がひとたびヨーロッパの地を踏めば、自分の興味や情熱が掻き立てられ、素晴らしい感動体験ができることは間違いない。

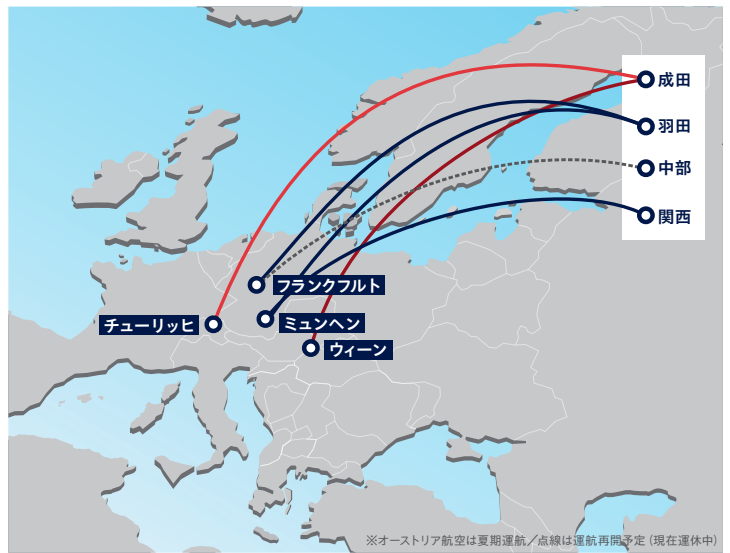
ハブ空港からヨーロッパ各地へ 利便性の高いアクセスを提供

LUFTHANSA GROUP

Network

ルフトハンザグループのネットワーク

ハブ空港であるフランクフルト、ミュンヘン、チューリッヒ、ウィーンからヨーロッパ各地へ充実のネットワークを誇る。主要都市なら複数のハブ空港から多くのフライトを運航しており、時間帯に合わせて幅広い選択肢の中からフライトを選択できる。



— Austrian オーストリア航空 — Lufthansa ルフトハンザ ドイツ航空 — SWISS スイス インターナショナル エアラインズ

Service

空飛ぶシェフ 「フライングシェフ」再開



2023年4月より、長距離路線ビジネスクラスの「フライングシェフ」が再開。ケータリング会社「DO&CO」との提携により、新鮮な地元の食材を使った世界各国の食事が味わえる。シェフによる雲の上でのグルメ体験は、忘れられない思い出となるはずだ。

www.austrian.com



関西—ミュンヘン線、 週3便で再開



使用機材は、環境にも優しい最新鋭のエアバスA350-900型機。ルフトハンザの日本路線で唯一出発時間が日本発／現地発ともに夜となり、日本各地からの乗り継ぎが便利。また現地着が早朝となるため、より多くの都市へ乗り継ぐことができる。

www.lufthansa.com



機内Wi-Fi、メッセージングアプリの 利用が無料に



スイス インターナショナル エアラインズ



2023年8月より、長距離路線の機内Wi-Fiサービス「SWISS Connect」に無料の「メッセージング」オプションが登場。WhatsAppやiMessage、Facebook MessengerやTelegramなどのメッセージングアプリのテキスト送受信が無料できるようになった。

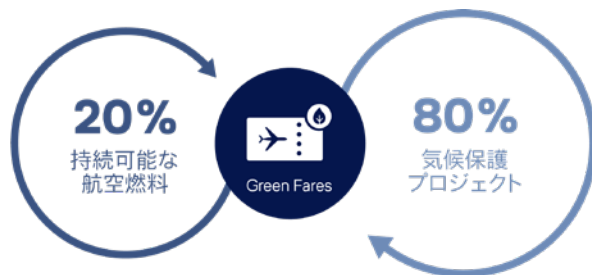
www.swiss.com



より持続可能な空の旅へ ルフトハンザ グループのサステナブルな取り組み

欧州内路線で「グリーン運賃」を導入 世界初、CO2排出削減に貢献

「グリーン運賃」は、フライトに伴うCO2排出削減に貢献できる世界初の試み。持続可能な航空燃料（SAF）の使用により、個人のCO2排出量を20%削減、残りの80%は、気候保護プロジェクトへ支援することでオフセットされる。より持続可能な空の旅を可能にする画期的な取り組みとして、2022年8月にテスト運用を開始。2023年2月から本格運用を開始した。



予約時点でカーボンニュートラルの手続きが可能

ルフトハンザ グループでは、欧州内路線以外でも、フライト予約の際にカーボンニュートラルな旅行ができる3つのオプションを用意している。

- ① 持続可能な航空燃料（SAF）の利用
- ② 認定済みの気候保護プロジェクトへの参加によるCO2排出量の相殺
- ③ ①と②の組み合わせ

SDGsへの取り組みが企業に求められる今、出張におけるCO2排出量の削減も重要な課題。予約済み、または利用済みのフライトでも、いつでもカーボンオフセットの手続きが簡単にできる。



ウェブサイト上で
カーボンオフセットの手続きが可能

オーストリア航空 www.austrian.com/jp/ja/carbon-neutral-flying

ルフトハンザ ドイツ航空 www.lufthansa.com/jp/ja/offset-flight

スイス インターナショナル エアラインズ www.swiss.com/jp/ja/discover/carbon-offsetting

2030年までにCO2排出量を半減 2050年までにカーボンニュートラルを実現

#MakeChangeFly

ルフトハンザ グループでは、2030年までのCO2排出量半減（2019年比）、2050年までのカーボンニュートラル実現を目標に掲げている。実現へ向け、幅広い革新的な施策を継続的に取り組んでいる。

行っている施策の一例

- 最新型の機材の導入
- 効率的な運航業務
- 持続可能な航空燃料（SAF）の利用
- カーボンオフセット
- インターモダリティ
- 廃棄物とプラスチックの削減



さまざまな交通手段を組み合わせるインターモダリティ（イメージ）





POLISH
TOURISM
ORGANISATION



Winter Attractions in Western Poland



西部ポーランド 冬の楽しみ方

憧れのポーランドポタリーや世界遺産、グルメなど、たくさんの魅力が詰まったポーランド西部。冬はクリスマスマーケットで賑わい、この季節ならではの表情を見せてくれる。リーズナブルに旅が楽しめるのも大きなポイント。西部ポーランドの冬の楽しみ方を紹介したい。

ドルヌィ・シロンスク地方

ポーランド南西部、チェコの国境に近いエリア

① ヴロツワフ *Wrocław*

世界遺産など見どころたくさん 冬はクリスマスマーケットへ

ヨーロッパの交通の要所であったことから、交易と商業の中心地として栄えたヴロツワフ。世界遺産「百年記念会館」をはじめ、聖職者の島「オストルフ・トゥムスキ」やロシア時代のモダニズム建築など見どころが数多く、ぜひ2〜3泊は滞在して欲しい。



冬なら中世の建造物に囲まれた旧市街の広場を中心に開催されるクリスマスマーケットにぜひ足を運びたい。地元っ子や観光客で賑わい、バンドの演奏を聴いたり、クローブが香る甘いホットワインで身体を温めたり、この時期だけの体験が待っている。

▼今年のクリスマスマーケットの開催日程
2023年11月24日から2024年1月7日まで

③ ヴァウブジフ *Wałbrzych*

壮大なクシオンシュ城 隠し財産「黄金列車」が眠る？

近郊にあるクシオンシュ城は、戦前までヨーロッパ屈指の富豪であったホッホベルク家の城として、北部グダンスク近郊のマルボルク城、古都クラクフのヴァヴェル城に続くポーランドで3番目の規模を誇る。



またこの地域は第2次世界大戦中、ナチスによる地下秘密基地造成計画があったとされる。建造途中で終戦を迎え、ヒトラーが金銀財宝を隠した黄金列車が埋められているのではという噂が近年話題となり、列車探しが行われている。市内のヴァウブジフ陶器博物館は、陶磁器作りの歴史とそのコレクションが圧巻だ。



② ④ シフィドニツァとヤヴォル *Świdnica/Jawor*

規制が生んだ絢爛豪華な ヨーロッパ最大規模の木造教会



17世紀半ばに建てられたヨーロッパ最大規模の木造教会が今に残る。質素な外観からは想像もつかないような豪華絢爛なバロック様式による内部装飾は実に見事で、どちらも世界遺産に指定されている。

このユニークな建物が生まれた背景には「規制」があった。プロテスタントによる反乱から勃発した三十年戦争の後、プロテスタント教会の建設が認められたものの、伝統的なカトリック教会のような頑丈で堅固な建物を建てることができなかった。それがこの木骨造りの巨大な平和教会を生み出した。こうした歴史背景も世界遺産指定の後押しとなっている。

シフィドニツァ(左)とヤヴォル(右)の平和教会

⑤ イェレニャ・グラ Jelenia Góra

瀟洒なマナーハウスや古城が点在 リーズナブルな滞在も可能



ホテル・パレス・ウォムニツァ Pałac Łomnica

それぞれ内装が違う客室はヨーロッパの伝統を感じさせる落ち着いた雰囲気
ミュージアムや地元の味を提供するレストラン、おしゃれなショップも併設 palac-lomnica.pl

かつての貴族や富豪が所有していた瀟洒なマナーハウスや小宮殿、古城が点在するチェコ国境のカルコニェ山麓に広がる小都市。その数はロワール河畔の古城よりも多いと言われる。現在、多くがホテルとなっており、小規模ながら行き届いた質の高いサービスを提供している。

⑥ ボレスワヴィエツ Bolesławiec

人気のポーリッシュポタリーの町 お土産探しにもぴったり

ポーリッシュポタリーの町。市内には陶器工場が複数あり、ファクトリーショップでショッピングも楽しめる。8月中旬には毎年陶器祭りが開催され、広場にはお気に入りの陶器を探す旅行者で賑わう。



ヴィエルコポルスカ地方 ポズナンを中心とするポーランド西部

⑨ ポズナン Poznań

ポーランド建国の地 イルミネーションが美しい

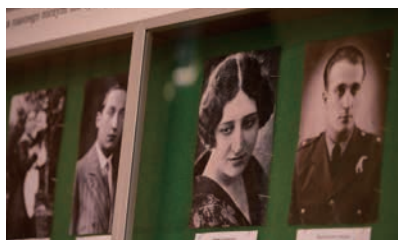
10世紀に首都が置かれ、ポーランド建国の地として知られる人口約50万人の商業都市。ワルシャワから飛行機で1時間弱、鉄道で3時間ほどとアクセスしやすい。クリスマスマーケットはヴォルノシチ広場とポズナン国際見本市で開催され、クリスマスツリーや観覧車のイルミネーションが特に美しい。また旧市街広場では、氷の彫刻とイルミネーションで幻想的な氷像フェスティバルが開かれるのでこちらも必見。



⑧ ルソヴォ Lusowo

第2次世界大戦の悲劇を知る 戦争のない平和を祈る場所

ヴィエルコポルスカ蜂起記念博物館は、第2次世界大戦中、ソ連軍の特殊部隊によって2万名を超えるポーランド将校が虐殺された「カティンの森事件」でただひとり犠牲となった女性、パイロットだったヤニナ・レヴァンドフスカ(写真中央)の生涯とその一家についての常設展がある。カティンで発掘された彼女の頭蓋骨のレプリカもあり、謙虚に平和を祈念したい場所のひとつ。



⑦ ヴォルシュティン Wolsztyn

鉄道ファンにはたまらない 現役の蒸気機関車に出会える町

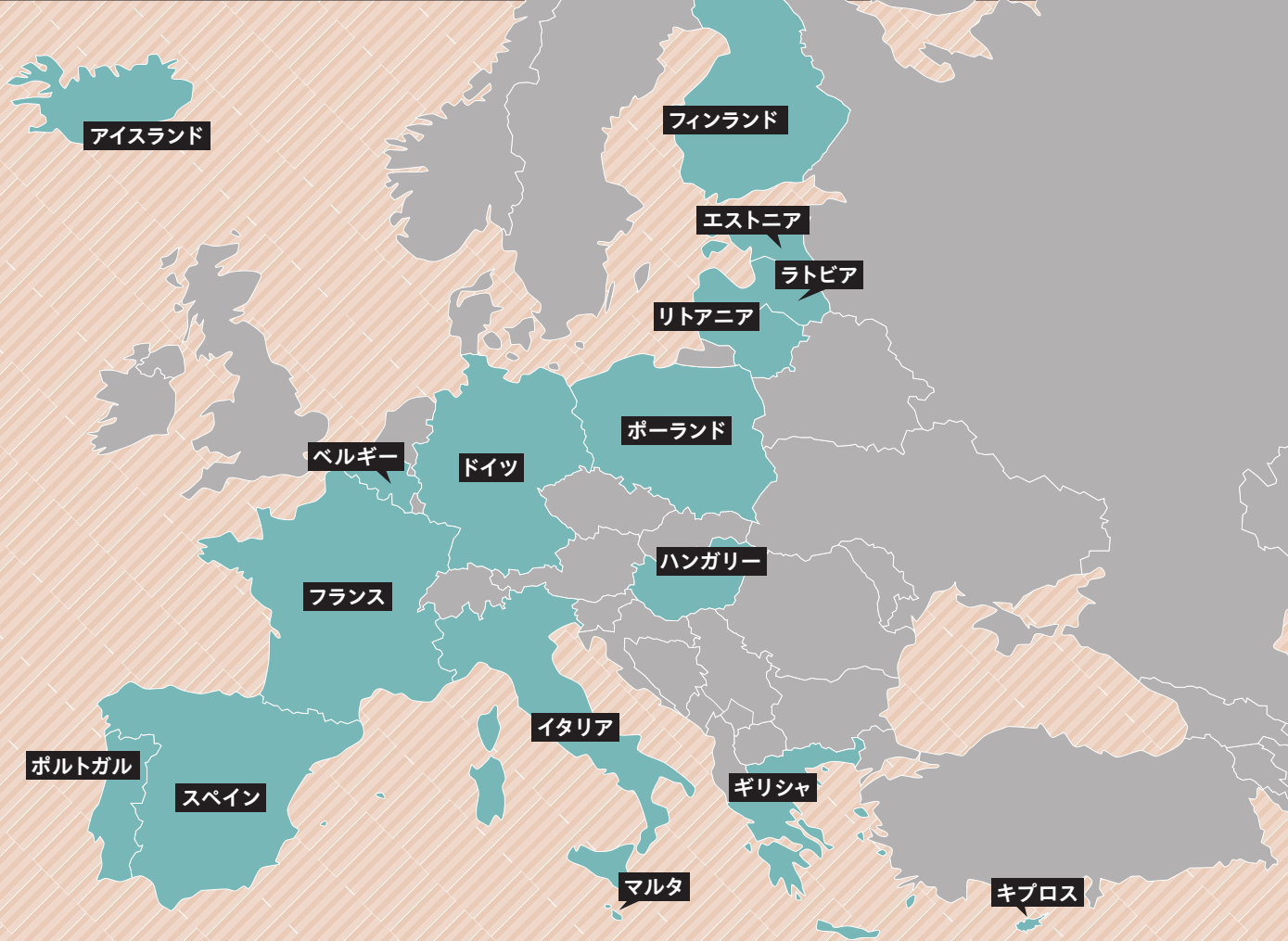


今でも現役の蒸気機関車が牽引する列車が、本数は少ないながらもここからポズナンや近郊の町レシュノまで走る。鉄道ファンならその雄姿をぜひ間近で見たい。

またこのエリアは、ヴィエルコポルスカ(大ポーランド)地方の伝統が残り、昔の農村生活を体感できる西ヴィエルコポルスカ地方郷土博物館がある。ほかにも北里柴三郎博士の恩師で、来日したこともある「細菌学の父」ロベルト・コッホが住んでいた住居が現在、ロベルト・コッホ博物館として公開されている。



写真提供:ポーランド政府観光局



多彩なヨーロッパの魅力 各国おすすめの旅行素材

歴史や文化、また自然の面においても多彩な表情を見せるヨーロッパ。
訪れる人を魅了し、再び訪れたいようなヨーロッパ各国のおすすめ旅行素材を各国の観光局に推薦して頂いた。
サステナブルな観点、またアドベンチャートラベルといった
新しい切り口による旅行商品造成にも参考になるラインナップだ。

Tourism diversity of Europe

ポルトガル Portugal



ポルトガル政府観光局
www.visitportugal.com/ja

自然を楽しむサステナブルな旅

ポルトガルでリフレッシュするなら北部地方ペネダ・ジェレス国立公園がおすすめ。他にもユネスコのジオパークに認定された自然公園が5カ所ある。太陽に愛された国ポルトガルは一年中自然を楽しめ、都市を離れ田舎でのんびり過ごす旅が人気だ。



©ATA Azores Tourism

www.visitportugal.com/ja/experiencias/natureza
www.visitportugal.com/ja/content/parque-nacional-da-peneda-geres

スペイン Spain



スペイン政府観光局
www.spain.info/ja

芸術家セサル・マンリケが提唱した 持続可能な観光が根付くランサロテ島

1960年代に島の街並みと観光資源の芸術監督として尽力。自然保護活動家でもあった彼が60年余りに推進した哲学は、独特の火山景観や青い海に溶け込む白い集落、火山活動によって生まれた洞窟を活用した博物館や観光施設に遺産として息づいている。



©スペイン政府観光局

www.spain.info/ja/toppu/sesaaru-manrike-ransarote

アイスランド Iceland



Visit Iceland
www.visiticeland.com

サステナビリティとアドベンチャーツーリズムの融合

自然という観光資源はそれ自体が脆弱なだけでなく、その土地のコミュニティにも影響がある。持続可能な旅行は重要だが、だからといって旅行中の滞在を楽しむことをやめる必要はない。そのヒントがアイスランドに隠されている。



©Visit Iceland

www.visiticeland.com/sustainable-travel

フランス France



フランス観光開発機構
www.france.fr/ja

美食の渓谷

日本とフランスの共通点、それは食への情熱！ディジョンとリヨン、マルセイユをつなぐ623キロのルート上で463もの素晴らしい食の体験プログラムが待っている。



www.valleedelagastronomie.com

イタリア Italy



イタリア政府観光局 (ENIT)
www.italia.it/en

イタリアで「プレジャー（業務渡航+体験）」

世界遺産登録が世界一で、芸術、食、ビジネス施設も充実のイタリア。業務渡航でもさまざまな趣味・体験を楽しめる。例えば、仕事後にローマでゴルフ（今年のライダーカップ開催地）、ラヴェンナでモザイク削り体験、ヨットで食前酒など、素材は無限にある。



www.italia.it/en

マルタ Malta



マルタ観光局
www.mtajapan.com

ゴゾ島でハイキング、ウォーキング

マルタ島からフェリーで30分。丘陵地帯が広がり、緑と海が織り成す絶景は、息を呑むほど美しい。秋から春にかけて、驚くほど豊富な動植物、特に色とりどりの野生の花や香りの良いハーブを見ることができる。地中海性気候のため、冬でも温かいのも魅力だ。



©マルタ観光局

ベルギー（フランダース地域） Belgium/Flanders



ベルギー・フランダース政府観光局
www.visitflanders.com/en

フランダースでのサイクリング

フランダースはサイクリストにとって夢のような場所。なだらかな風景、歴史的な芸術都市、厳しい坂道や石畳、そして絵のように美しい環境の中を駆け抜ける体験が待っている。深く根付いたサイクリング文化は、フランドル人の心を惹きつけてやまない。



©Pas Normal

www.visitflanders.com/en/discover-flanders/cycling

ベルギー（ワロン地域） Belgium/Wallonia



ベルギー観光局ワロン地域
visitwallonia.be

ワロンの魅力的な町や小さな村々

世界一小さな町デュルビュイ、アンヌヴォワ庭園、岩の上に佇むモダーヴ城、ムーズ渓谷とディナンの城塞の下で味わうワロンのビール、修道院とトラピスト



COPYRIGHT WBT - Anibal Trejo

ビール、そしてダルシスの美味しいチョコレートもお忘れなく！

(動画) bit.ly/DiscoverWallonia
visitwallonia.com/en-gb/3/where-to-go-in-wallonia/walloon-towns-and-cities
visitwallonia.com/en-gb/3/i-love/heritage-and-culture
visitwallonia.com/en-gb/3/i-love/food-and-drink/specialities

ドイツ Germany



ドイツ観光局
www.germany.travel

51のユネスコ世界遺産を訪れる旅

ドイツには、旅に出たくなるような魅力的な世界遺産が溢れている。中世の町から壮麗な宮殿や大聖堂など、何世代に渡り守られてきた文化を体験してみたいか？



©DZT/Francesco Carovillano

4travel.jp/magazine/sp/germany2106

ヨーロッパ
visiteurope.com

次のページに続く

フィンランド Finland



Visit Finland / フィンランド政府観光局
www.visitfinland.com/ja

オーロラ観賞

フィンランドの国土の約1/3が北極圏にあたるが、サンタクロースが住んでいる街があることで知られている。8月末頃から秋が始まり、毎年この頃から夜空にオーロラが出現し始める。オーロラの季節は3月末まで続く。



© Visit Finland

ラトビア Latvia



ラトビア投資開発庁
www.latvia.travel/ja

ラトビアのハンドクラフトを巡る旅

ラトビアには素晴らしい手工芸の伝統が多く残っている。手袋のミトンをはじめ、多くの手工芸品には太陽や月、星、水などの伝統模様が守護神として施されている。ラトビアでご自身の守護神を見つけてみてはいかが?毎年6月の民芸市に合わせての旅行がおすすめ。



© Latvia Travel

www.latvia.travel/ja/minjianchuancheng

ハンガリー Hungary



ハンガリー政府観光局
visithungary.com

SDGsを念頭に改修された「くさり橋」

1849年に建設されたブダペストのランドマーク「くさり橋」の改修工事が完了。橋の通行は、路線バスやタクシーなどの公共交通機関と、自転車やバイクに限られており、観光バスの乗り入れはできない。歩行者は橋の両側の歩道と再建された地下道を利用できる。



ギリシャ Greece



ギリシャ政府観光局
(Greek National Tourism Organization)
www.visitgreece.gr

一年中太陽の光が降り注ぐ、ハネムーンに最適なギリシャの島々

人気のサントリーニ島、ミコнос島、コルフ島だけでなく、ビザンチン様式の町ミストラスでおとぎ話の騎士や王女になったり、ヨーロッパ最大級の中世の町ロードス島でロマンスを再発見したり。ギリシャの景観の美しさと多様性は、お二人の愛を祝福する。



© GNTO / Photo P. Merakos

www.visitgreece.gr/inspirations/romantic-holidays

エストニア Estonia



エストニア政府観光局
www.visitestonia.com/jp

エストニアで叶える美味しい旅

2022年の夏、バルト三国で初めてミシュランガイドがエストニアに初上陸。今年も新たに星を獲得したレストランやガイドに追加されたレストランが発表され、エストニアのレストラン・シーンはますます盛り上がりを見せている。



Credit: Renee Altrov

リトアニア Lithuania



リトアニア政府観光局
<https://www.lithuania.travel/jp>

リトアニア式サウナ「ピルティス」

リトアニアのサウナはピルティスと呼ばれる。北欧のサウナとは違い、サウナマスターと共に、ウィスキングやハーブ、サウナフードを楽しむスピリチュアル・プログラムとなっている。リトアニアには各地にサウナが点在している。ぜひ体験してみてください。ぜひ体験してみてください。



© Laimonas Ciunys Lithuania Travel

www.lithuania.travel/en/news/the-lithuanian-sauna-experience

ポーランド Poland



ポーランド政府観光局
www.poland.travel

繊細な手編みレースに世界が注目、南ポーランド・コニャクフ村

南部、スロバキア国境に近いコニャクフは、手編みレースで知られる村。レース編みは、140年程前から農家の主婦が始めたもので、極細の糸を使った繊細な模様が世界的にも注目されている。主に自然をモチーフとし、お土産に購入することも可能。



centrumkoronkikoniakowskiej.pl

キプロス Cyprus



キプロス共和国観光担当省
www.visitcyprus.com

古代遺跡「王族の墓」

世界遺産の街パフォスで発見された古代ギリシャからローマ時代にかけての貴族階級の墓跡。固い岩盤を掘って作られた地下墳墓で、時代は紀元前4世紀。ドリス式の装飾が施された支柱が見どころで、その壮麗さから「王族の墓」と呼ばれるようになった。



提供:キプロス共和国観光担当省
(Deputy Ministry of Tourism, Republic of Cyprus)



ヨーロッパの中央を流れる大河ドナウの両岸に広がる美しいブダペストの街並み
王宮のあるブダ側と対岸のペスト側を結ぶ「くさり橋」(写真中央)は、2023年8月に
改修を終えたばかり。美しいライトアップも復活しているので必見だ。

新しい観光の目玉

過去と未来をつなぐ ブダペストのユニークな建築遺産を発見



黄金時代の姿を取り戻す ブダ王宮復元プロジェクト

ハウスマン国家事業

ドナウ川の西岸、ブダペストのブダ側に建つブダ王宮は、古くはハンガリー王国の王宮として13世紀以降、長い間この地を治めた古い歴史を誇り、現在ではブダペスト随一の人気観光スポットだ。

現在の王宮は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代の19世紀末にハウスマン・アラヨシュの設計により建てられたもので、荘厳なバロック様式が特徴。第二次世界大戦末期に壊滅的な破壊を受けたが、その後ハンガリー国民の努力により再建されたものの、いくつかの建物は再建されずに放置されていた。

ハンガリー政府は、国民のよりどころでもあるブダ王宮を復元するプロジェクト「ハウスマン国家事業」を2019年にスタート。以来、王宮周辺を含め、いくつかの建物が当時の姿に復元されており、新たな観光スポットとなっている。



王宮南回廊に復元された聖イシュトヴァーンの間「宮殿の宝宝箱」と称され、内部には1900年のパリ万博で大賞を受賞した作品で、1kgもの純金を使ったジョルナイの暖炉など、当時の名工たちの作品の数々が復元されている。



創建時の荘厳な姿を取り戻した覆い馬場
第二次世界大戦末期に破壊され、その後は更地となっていた。現在は、カフェや多目的ホール、イベント会場としても利用できる。衛兵詰め所も再建された。

日本人設計の新ミュージアムも ブダペスト市民公園の再生プログラム

リゲト・ブダペスト・プロジェクト

オーストリア＝ハンガリー二重帝国の時代に整備され、ブダペスト市民や観光客にも親しまれてきたブダペスト市民公園。現在、この公園を中心とした再生プログラム「リゲト・ブダペスト・プロジェクト」が進行中だ。

新たに国立民族学博物館やハンガリー音楽の家がオープン。また、これまでであった国立西洋美術館、ハンガリー千年の家の改修も完了、今後は新国立美術館のオープンを控えている。

なかでも、音楽の家と新国立美術館は、日本人が設計を手掛けており(音楽の家:藤本壮介氏、新国立美術館:SANAA)、ハンガリーと日本の良好な関係を象徴している。



ハンガリー千年の家は公園で最も古い建物のひとつ
改修後はコンテンポラリーアートの展示スペースとして生まれ変わった。



ヨーロッパ最大のコレクションを誇る国立民族学博物館は、2022年5月にオープン
公園の環境に調和したユニークな弧を描いた建物が特徴。



2022年1月にオープンしたハンガリー音楽の家
光を多く取り入れたそのユニークな形状は、浮遊する音符をイメージしたもので、ハスの実を思わせる。地下にはハンガリーの音楽が学べる博物館、地上にはコンサートホール、野外ステージなどがあり、貸し切りコンサートや施設見学もできる。

第7回ジャパン・ツーリズム・アワード 審査委員特別賞(海外領域)受賞

JAPAN
TOURISM AWARDS

スペイン政府観光局(スペイン大使館観光部)は昨年10月にユニバーサルツーリズムの視察旅行を実施した。老若男女や障がい者など、すべての人々に旅行の機会を提供するユニバーサルツーリズムは観光参事官兼同局局長のハイメ・アレハンドレ氏が「スペインは障がい者に優しい街づくりへの取り組みが進んでいる国」として、2020年9月の着任からプロモーションテーマの一つに掲げてきたものだ。このほど、こうした取り組みが、第7回ジャパン・ツーリズム・アワード審査委員特別賞(海外領域)を受賞した。

障がい者のみならず、高齢化社会が進む日本の市場にとっても、ユニバーサルツーリズムは今後欠かすことのできない要素となるだろう。視察旅行で得た情報をもとに、スペインのユニバーサルツアーの可能性を探る。



視察ツアー参加者のトレド展望台での集合写真
(トレド展望台は、車を降りて数メートルで絶景の展望が可能で、参加者から大変評価が高かった場所のひとつ)

ユニバーサルツーリズムの先進地 スペインで視察ツアーを実施

車椅子旅行者も参加 当事者目線も交えた視察旅行

このたびの視察旅行に参加したのは、ユニバーサルツーリズムに取り組んでいる旅行会社3社と、世界30カ国以上を旅している車椅子トラベラーの三代達也氏。行程は、マドリード市内観光やトレド、アビラ、エル・エスコリアルへの観光、その後スペイン高速鉄道AVEにて移動し、セビージャ、バルセロナを巡りサグラダ・ファミリアなど主要な観光地を訪れるというものだ。

スペインでは障がいのある人もない人も、すべての人が同等の権利を得ながら暮らせるようにと各地でユニバーサルデザインのまちづくりが進められ、州や地域により差はあるが、建物へのスロープ設置や道路の平坦化が各地で行われているほか、バスやトラムなど公共交通機関のバリアフリー化が進んでいる。さらに、古い教会や修道院などの観光スポットでも車椅子用の導線が確保されている。「国民のバ



ミニバンなど車椅子車両の手配はリクエスト可能



セビージャの街中を走るトラムは完全バリアフリー

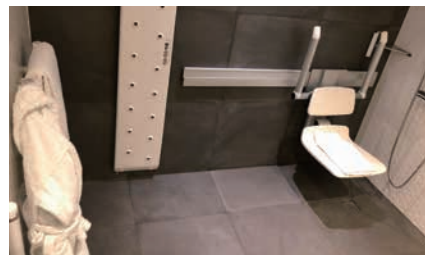
リアフリーに対する意識は高く、街なかでも日本に比べ、車椅子で街に出ている人々を見かける機会が多かった」と視察旅行に随行した同観光局プロモーションマネージャーの風間裕美氏は話す。また参加者からも「石畳など、車椅子では動きづらいところでは、すぐ人々が手伝ってくれた」「街の人々が障がい者・高齢者等との共存に慣れていると感じた」という声が聞かれ、スペインのソフト面のバリアフリーが進んでいることを実感できた。

福祉団体が運営する ユニバーサルホテル「イルニオン」

では実際に素材を見てみよう。まずスペインのユニバーサルツーリズムの取り組みとして特筆したいのが、ホテルチェーン「イルニオン/llunion」だ。

これはスペインの福祉組織ONCE(オンセ/Organización Nacional de Ciegos Españoles)が運営するもので、母体は1938年に発足した視覚障がい者団体。1988年にあらゆる障がいに枠を広げ、職業訓練や雇用促進、社会的共生を目的とした活動を行っている。財源となる宝くじはスペイン中で販売され、その存在は社会的にも広く認知されている団体だ。

ホテル「イルニオン」は完全ユニバーサルデザインをコンセプトとした世界でも珍しいホテルチェーンで、マドリード、バルセロナ、セビージャなどスペイン各地に現在29軒を展開している。しかも従業員の7割が何らかの障がいを持つ人々で、多様な人材が十分に能



ホテル「イルニオン」。風呂内のシャワーチェアは高さが変えられボイドライヤーも設置されている。客室はセンサー付きの自動扉付き。絨毯も毛が短く車椅子でも動きやすい



エレベーターホールをはじめ、館内にはスタッフの写真が使われているが、これはホテルを訪れてくれるお客様が私たちを社会で活躍させてくれているというメッセージでもある

力を発揮できる職場環境を整備している。ホテルのファンリティはそうした「当事者」の意見を取り入れ、かつデザイン性も重視した造りともなっているのだ。三代氏も「今まで訪れたどのホテルよりも素晴らしかった」と語り、旅行会社社からも「この取り組みはスタディツアーのコンテンツになる」といった意見も聞かれるなど、ビジネスモデルとしても非常に興味深いものがある。なによりこうした宿泊施設があるということは、ユニバーサルツアーを造成するうえでは非常に心強い。

トイレなどは問題なし 移動の少ないトレドの展望台が好評

観光素材についてはまず、三代氏が「どこへ行っても車椅子が入れるくらいの大きなトイレがあるのが日本との大きな違い」と語るなど、トイレをはじめ美術館やレストランなどの内部に関してはほとんど車椅子での移動が可能。一部の地域ではバンなど車両の進入が制限されているところもあるが、ブラド美術館などは障がい者車両であれば事前に許可を取ったうえで、美術館に横付け停車ができる。またマドリードの「視覚障がい者博物館」は文字通り目の不自由な人に配慮した美術館で、



ヨーロッパのアクセシブルシティとして賞を授与された世界遺産都市アビラ

音声や触覚による美術作品の鑑賞が楽しめる、世界でも珍しい博物館のひとつ。もちろん内部は完全バリアフリーだ。マドリードのスペイン広場は緩い坂道ではあるものの、車椅子で移動ができる路面だが、マヨール広場は古い石畳であるため、サポートが必要な部分もある。



視覚障がい者博物館では触覚で楽しめる展示(写真はサグラダ・ファミリア)



トレド渓谷展望台へ向かう

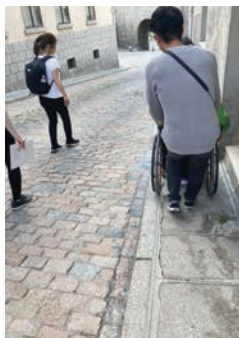
トレドの展望台は、今回の視察ツアーでは評価が高かった場所のひとつ。路上に駐車スペースがあり、移動せずに展望台にアクセスが可能

で、トレドの絶景を楽しめるのがその理由だ。この展望台の上にあるパラドールに宿泊して夕景や朝の風景を眺めるなど、ゆとりを持った行程を組んでもいいだろう。

一方、中世の趣を残すトレドの旧市街は石畳やアップダウンも多く、車椅子利用者にも負担は少なくサポートが求められる。訪れ

るなら電動アシスト付きの車椅子を用意するなど準備が必要だ。大聖堂をはじめサント・トメ教会の見学は、少人数であれば車などを利用したほうがスムーズだ。

またアビラは、ヨーロッパのアクセシブルシティとして賞を授与された世界遺産都市。この街の観光名所の城壁は、車椅子利用者だけでなく、視覚・聴覚・知的障がい者を含むすべての人がアクセスできるように配慮されている。



石畳やアップダウンは事前の情報が大切

街歩きが楽しめるセビージャ AVEは事前予約が必要

セビージャは大聖堂の内部も車椅子で見学ができるほか、中心部の歩道は舗装されている。スペイン広場共々車椅子でも移動しやすく街歩きが楽しめるほか、馬車を利用すれば、歩くのが困難な高齢者でも楽に観光できる。

バルセロナも市内の大通りは舗装されており、車椅子でも移動ができる。サグラダ・ファミリアは出入口の一部に介助が必要な部分もあるが、内部はバリアフリーとなっており、車椅子での見学には問題がない。カタルーニャ音楽堂はホール内がスロープであるうえ、車椅子の場合は最前列でパイプオルガンの演奏などを聞くことができるなど、特別なひと時が演出できるだろう。



高速鉄道AVEを利用。AVE車椅子専用リフト(写真上)とAVE内部の様子(写真下)

また今回はマドリードのアトーチャ駅からセビージャ駅までスペイン高速鉄道AVEを利用。車椅子専用席があるが、車椅子利用時には専用のリフトを利用することになるので事前の予約が必要。障がい者サポートスタッフが常駐しており、必要なサポートを提供してくれる。

写真1枚でも情報 旅の機会提供もビジネスチャンス

視察旅行を終えて、参加者からの課題として最も多かったのは「正確な情報」だ。

「事前の情報共有は必須。現地でも変更を余儀なくされるより、行く前に状態がわかって

いれれば回路などを準備ができる。写真1枚を載せるだけでもかなり心構えなどが変わる」と三代氏。このほか主要な交通機関や観光地などの入り口の段差やスロープの有無なども、求められる最低限の情報のひとつとして挙げられていたので、ツアーオペレーターなどは今後、こうした点にも留意しつつ、情報収集をしておくといいたいだろう。ホテルなどの高級感あふれる毛足の長い絨毯は、車椅子では却って動きづらいなど、障がい者目線での情報・リサーチも必要だという声もあった。



「スペイン料理は日本人の口に合う」と高評価



マドリードのサン・ミゲル市場
低い視線に合わせたショーウィンドウ。
子供の視点的にも優しい

国連によると、何らかの理由で障がいを持つ人々は世界人口の約10%に当たるといいます。またスペインに限らず、すべての人が平等の権利を受容するといった取組は世界的な潮流となっており、今後の高齢化・多様化の社会での旅を考えたとき、ユニバーサルツーリズムは避けて通ることのできない分野となるだろう。こうした人々に手を差し伸べることも、旅行会社にとってはビジネスチャンスのきっかけの一つとして積極的に捉えていきたい。



バルで低い椅子があると一緒に乾杯ができる



ビジネス・レジャー両面で世界各地への渡航需要が回復基調を迎える中で、ターキッシュ エアラインズが日本路線の強化に乗り出している。約7年ぶりに関西空港とイスタンブールを結ぶ路線を再開。さらに成田ーイスタンブール線も12月から週4便から週7便に増便する。これにより日本路線の座席数が週2400席増加。同社が誇る世界最大のネットワークをあわせて日本から海外へのさまざまな旅行ニーズにあわせて活用することが可能となる。



ドリームライナー（ボーイング 787-9 型機）

ターキッシュ エアラインズが 関西に戻ってくる



日本路線の座席数大幅増、多彩な旅行需要に対応可能

関西ーイスタンブール線、最新鋭機材のボーイング787-9型機を使用

関西ーイスタンブール線は12月12日から運航を再開する。運航日は月・火・金・日曜日の週4便となる。機材は同社が保有する機材の中で最新のものとなるボーイング787-9型機を使用する。座席数はビジネスクラス30席、エコノミークラス270席の計300席となっている。同社の定期便が関西空港に戻ってくることにより、西日本エリアから世界各地へのアクセスが一段と向上することとなる。

成田線がデイリー運航に増便、東京路線の座席供給数36%増

東京路線に関しては現在週4便で運航する成田ーイスタンブール線が12月15日から週7便に増便され、デイリー運航体制を実現する。これにより現在デイリー運航を行っている羽田ーイスタンブール線をあわせて週14便体制となる。

東京路線の使用機材は、成田線については、再開される関西線と同様のボーイング787-9型機を使用する。一方、羽田線に関してはボーイング777-300ER型機を使用している。777-300ER型機の座席数はビジネスクラス49席、エコノミークラス300席の計349席となる。12月に成田線が増便されることにより、座席供給数は36%増の4543席となる。

広範囲な路線ネットワークで日本から世界各地へ円滑にアクセス

ターキッシュ エアラインズの大きな特徴の1つが広範囲な路線ネットワークだ。同社は現在国内線53路線、国際線291路線を運航。就航都市数は世界129カ国344都市を誇る。このネットワークに加え、今回日本路線を大幅に強化し、座席供給数を大幅に増やすことで、日本各地からの個人・ビジネス旅行から団体旅行までさまざまなニーズに対して円滑に対応することが可能となる。

運航スケジュール

【関西ーイスタンブール】(12月12日から運航開始、※月・火・金・日曜日運航)

運行日	便名	出発地	出発時刻	到着時刻	到着地
月・火・金・日	TK087	関西(KIX)	22:25	▶ 05:55+1	イスタンブール(IST)
	TK086	イスタンブール(IST)	02:35	▶ 20:05	関西(KIX)

【成田ーイスタンブール】(12月15日から毎日運航)

運行日	便名	出発地	出発時刻	到着時刻	到着地
毎日	TK051	成田(NRT)	10:15	▶ 18:00	イスタンブール(IST)
	TK050	イスタンブール(IST)	15:20	▶ 8:30+1	成田(NRT)

【羽田ーイスタンブール】(毎日運航)

運行日	便名	出発地	出発時刻	到着時刻	到着地
毎日	TK199	羽田(HND)	22:55	▶ 06:45+1	イスタンブール(IST)
	TK198	イスタンブール(IST)	02:40	▶ 19:45	羽田(IST)

※時間はすべて現地時間／運航スケジュールは予告なく変更される場合があります +1：翌日着

ザ・ベスト・エアライン・イン・ヨーロッパ2023を受賞



ターキッシュ エアラインズは英国のSKYTRAX社が実施する航空会社ランキングにおいて世界6位の評価を獲得するとともに欧州のエアラインの中で最高評価となる「ザ・ベスト・エアライン・イン・ヨーロッパ2023」を受賞した。特に機内

食についてはビジネスクラス、エコノミークラス双方で最高評価を獲得しているほか、ヨーロッパの航空会社におけるエコノミークラスの座席についてもトップ評価を獲得している。

豊富な機内プロダクトを用意 機内食も刷新

12月に再開される関西―イスタンブール線とデイリー―運航に増便する成田―イスタンブール線には同社の最新鋭機であるボーイング787-9型機(ドリームライナー)が投入される。ビジネスクラス・エコノミークラスとも充実な設備を備え、快適な空の旅を実現する。

ビジネスクラスは1-2-1の座席配列を実現。すべての座席において容易に通路にアクセスすることが可能となる。座席はフルフラットのリクライニングを実現するとともにシェルタイプの形状となっている。中央座席には座席間にプライバシーパネルを用意し、よりパーソナルな空間を提供する。このほか、収納スペースや幅広のカクテルテーブル、18インチの大型HD液晶画面によるエンターテインメントサービスの提供など、ラグジュアリーな空間を実現する。

エコノミークラスは約15cmのリクライニングと約78cmのレッグルームのゆとりある空間を実現。充実の設備でより快適な空の旅を提供する。

また、ターキッシュ エアラインズのフライトを彩るのが機内食だ。機内食についてもこのほど内容を一新。トルコの魅力をアピールする一環でトルコ産の食材を活用して、トルコの伝統料理と世界の多彩な料理を提供する。ビジネスクラス、エコノミークラスともにメニューのラインナップを拡充。さらに健康面に配慮した料理を提供するとともに、プラスチックや包装廃棄物の削減も行うなどサステナビリティにも考慮した内容となっている。



ビジネスクラス・エコノミークラスと共にメニューのラインナップを拡充

ビジネスクラス 全席通路側でよりラグジュアリーでパーソナルな空間に



エコノミークラス 充実の設備でより快適な旅を実現



乗り継ぎ時にイスタンブールを楽しむ 多彩なプログラムを用意

ターキッシュ エアラインズは日本から世界各地へスムーズにアクセスすることが可能。その経由地となるイスタンブールも世界有数の観光都市だ。同社ではイスタンブールの魅力を旅の途中で体感することができるプログラムも用意している。

● ストップオーバー・イスタンブール

このプログラムは対象の国または都市を発着し、イスタンブールで20時間以上滞在する旅客に対してイスタンブールの宿泊施設を無料で提供するプログラムだ。

ビジネスクラス利用者には5つ星ホテル最大2泊分、エコノミークラス利用者には4つ星ホテル最大1泊分を無料で提供する。

利用可能なホテルはいずれもイスタンブールの中心街に立地しており、旅の途中に滞在してさまざまな体験をすることが可能だ。

● ツアー・イスタンブール

このプログラムは、ターキッシュ エアラインズ利用者でイスタンブール空港での乗り継ぎ時間が6時間から24時間の旅行者を対象に無料でイスタンブール市街地の観光に案内するというもの。乗り継ぎ時間によって、6つの異なるツアーコースがあり、各コースにはイスタンブールの歴史的遺産や伝統料理を楽しむことができる。

申込は到着後空港ターミナル内の「HOTEL DESK」で行う。

大阪開催の 「ツーリズムEXPO ジャパン2023」にあわせた 特別企画も

実に約7年ぶりとなる関西―イスタンブール線の再開が目前となる10月26～29日に大阪市インテックス大阪で開催される旅の祭典「ツーリズムEXPOジャパン2023」にターキッシュ エアラインズも出展する。

ツーリズムEXPOジャパンの開催にあわせて同社はマイレージプログラム「Miles & Smiles」のキャンペーンを展開するほか、同イベント限定で提供する特別運賃を用意することとしている。その気になる内容はEXPO会場のターキッシュ エアラインズのブースで発表することとしている。気になる人は是非訪れてみよう。

A STAR ALLIANCE MEMBER ✨

再会は空の上で 大阪

2023年12月12日より運航再開



TURKISH AIRLINES

JAPAN